

代表派遣会議出席報告（HP掲載用）

平成 19 年 5 月 23 日

西田 治文

1 会議概要

1) 名称

（和文）国際生物科学連合第 29 回総会

（英文）International Union of Biological Sciences, 29th General Assembly

2) 会 期 平成 19 年 5 月 9 日～ 13 日（5 日間）

3) 会議出席者名

西田 治文

4) 会議開催地

アメリカ合衆国、ワシントン DC

5) 参加状況（参加国数、参加者数、日本人参加者）

参加国 36；参加者数 190 名

日本人参加者 星 元紀（IUBS 会長・放送大学）、西田治文（中央大学）、

馬渡峻輔（北大）、東中川徹（早大）

6) 会議内容

・日程及び会議の主な議題

9 日 開会、総会（挨拶、本会議講演、業務報告、レセプション）

10 日 ポスター発表

10-12 日 シンポジウム：21 世紀への生物科学-地球規模変動の時代における持続的発展への挑戦を集約する-（12 日午前まで）

12 日午後 シンポジウム：持続性のための教育

13 日 総会（執行委員会・作業部会報告、会則変更、年次計画・予算案審議、新役員選挙、次期総会開催地）

・会議における審議内容・成果

2004-2006 年の活動報告と会計報告が承認され、2007 年以降 3 年間の年次活動計画と予算案が承認され、新役員が選出された。

・会議において日本が果たした役割

星元紀氏が現会長として会務全般に関わるとともに、本会議講演を行った。西田は総会・シンポジウムに参加して情報収集を行うとともに、役員候補選出作業部会会員として候補の選任にあたった。また、総会では議決権を行使した。馬渡峻輔氏は並列開催の国際動物命名規約委員会に委員として出席した。

・その他特筆すべき事項

ダーウィン生誕 300 周年にあたる 2009 年を“ダーウィン年”として記念行事などを企画することとなった。また、執行委員などの役員候補推薦が少ないので、今後は次期総会 1 年前までに推薦依頼をすることと、役員は優れた人材であることが第一で必ずしも IUBS 会員国・団体に所属する必要が無いことを確認した。

2. 会議の様相

初日総会では 2004 年の 28 回総会以降 3 年間の活動総括が行われ、内容は承認された。総会后、イタリアの Giorgio Bernardi 氏が Natural Selection in Genome Evolution という題で、星元紀会長が Alternation of Reproductive Modes: A Mechanism in Evolutionary Biology という題で本会議講演を行った。予算報告も適切になされ、内容が承認された。会務終了後、アメリカ・ナショナルサイエンスアカデミーのホールにおいて歓迎レセプションが開かれ、交歓は 21:30 まで続いた。

2 日目から 4 日までのシンポジウムでは、以下の 6 セッションが順次開催され、パネル討論であったセッション 6 以外はそれぞれ 6 名ずつの話題提供があった。日本人発表者は無かった。平行して 3 日目にはポスター発表が会場前の広間で行われ、16 件の発表があった。また、4 日目には教育を中心とした別のシンポジウムが開催され、8 件の発表とパネル討論が行われた。

持続性を目指した多様な問題設定と手法の模索は、それぞれのセッションの題にも反映されている。日本国内では総合的にこのような問題に取り組む体制が十分に整備されたとは言えず、今後国内委員会において積極的な議論を進める必要がある。

Scientific Symposium: Biological Sciences for the 21st Century: Meeting the Challenges of Sustainable Development in an Era of Global Change

Session 1: Overviews of Key Developments in the Biological Sciences

Session 2: The Challenges of Ecosystem Services

Session 3: The Challenge of Food Security

Session 4: The Challenge of Population Health

Session 5: The Energy Challenge

Session 6: Transforming Research into Solutions

Symposium: Education for Sustainability

シンポジウムの規模と参加者数は前回のカイロ総会のそれを下回り、カイロでは多数並列開催されたワークショップがひとつも無かったので、全体として活気に欠けた。原因としては、開催地の滞在費が高額であったことと、地元アメリカの参加者があまり多くなかったことによると思われる。

中国は医学系、動物学系、植物学系、生態学系をそれぞれ含む 5 名以上の参加者があり、IUBS への高い関心を切実に感じた。星会長の退任に伴い、日本の IUBS における役割は減少している。新旧執行部には日本から会長以外の委員がいない状態が続くので、今後 IUBS 分科会などにおいて日本の役割を高めてゆく努力がなされる必要がある。

最終日の総会では、事業計画と予算案が承認された。事業計画は、継続計画として、Integrative Biology (代表：星 元紀)、DIVERSITAS (同 C. Scheidegger)、Human Dimensions of Biodiversity(K. Bawa)、Biological Education (J. Jungck)、Bioethics (J. Buckeridge)の 5 件が承認され、2 件(Systematic Agenda, Bionomenclature)が役目を果たしたとして終了となった。さらに、下記 5 事業が新規に認められた。

新事業(代表)

Biology and Traditional Knowledge (A. Palmisano)

Bio-Energy (C. Astier)

Global Change (C. Scheidegger)

Integrative Climate Change Biology : ICCB (?)

2009 “ Darwin Year ” Celebration (G. Bernardi)

通常会員(加盟各国)の負担金は、ユーロが好調なため、前 3 ヶ年よりやや軽減された。日本は従来どおりカテゴリー19B でアメリカ、ロシアに次ぐ負担額で、年間 44,650 ユーロとなる。現在 42 加盟国があるが、7 ヶ国が負担金を滞納している。また、以前脱退したままになっているカナダとイギリスに再加盟を促すよう働きかけることが確認された。

下記のように役員改選が行われた。新役員は 2008 年からの就任となる。特にこれまで 27 年間事務局長・執行委員長を務めた Talal Younes 氏が退任するので、新執行部は責が重い。

新役員

会長 John Buckeridge, Australia

副会長 Giorgio Bernardi, Italia

John Jungck, USA

事務局長 Christoph Scheidegger, Switzerland
会計 Erwin Beck, Germany (留任)
執行委員 12 名
Russell Chapman, USA
Chou Chang Hung, China Taiwan
Yuriy Dgebaudze, Russia
Annelies Pierrot-Bults, Netherland
Lorna Holtman, South Africa
Jean Marc Jallon, France
Andrew Polaszek, UK
Pavao Rudan, Croatia
Hussein Salama, Egypt
Nils Stenseth, Norway
Zhang Zhibin, China
Juan Pablo Suarez, Ecuador

次回開催予定 2010(平成 22)年 秋ごろ、於 南アフリカ



星会長の開会挨拶(左)と全米科学アカデミーホールでの歓迎レセプション



シンポジウムの様子(左)及び最終日総会で決定した新役員と新会長スピーチ